



「心配 chic」

西澤 真理子

リテラシー（リテラジャパン）代表・社会学博士

表題は、20年前のニューヨークタイムズの記事の見出しだ。

「心配スタイル」、とでも訳せるかもしれない。

「Don't relax. There's always something to worry about. (リラックスしてはだめだよ。いつも必ず心配事があるのだから)」と記事は書き出す。

「ワインには化学物質が混入しているかもしれない。スシには寄生虫がいるかも。目に見えないけれど放射性で危険なラドンが地下室にこっそり入り込んでいるかもしれないですよ」と続く。

なぜか、20年前に書かれたものとは思えないほど、新鮮に読める。

今年の日本を振り返れば、食品の賞味期限の偽装や食の安全の話題でもちきりであった。

しかしその一方、安全性には問題にはなかったにもかかわらず、大量の食品が回収され、廃棄された。

業者のウソに不信感を募らせた一方、捨てられちゃうなんて、まだ食べられるのに、もったないなあ、との感を抱いたのが平均的な消費者像であっただろう。

日本人にとって、食は生活の中でプライオリティが高い。だから、食品の安全に敏感に反応するのは、当たり前と言える。

でも、「心配 chic」と呼ばれないよう、メディアの度重なるセンセーショナルな報道にも、もう少し冷めた目を向けることもそろそろ必要かなと感じている。

(2007年12月31日UP)